

自閉症に対する関係発達支援の基本

小林 隆児*

Key words : *pervasive developmental disorder, relational development, attachment, approach-avoidance motivational conflict, amodal perception*

I. はじめに

長い間、自閉症の一義的原因を言語認知障害(言語認知障害仮説)に求める考えが世界の主流を占めてきたが、最近になって、対人関係障害そのものに立ち戻り、原点から捉え直そうとする動きも垣間見えてきた。

言語認知障害仮説の最大の問題は、言語認知機能という人間の高等な精神機能がどのようにして獲得されていくか、その発達過程そのものをほとんど真正面から検討することなく、今ある言語認知能力そのものの評価結果のみを拠り所にして、仮説を構築したところにある。人間を外界に対して閉じられた存在として捉え、個体内の能力評価にのみ焦点を当てて人間の精神発達を捉えようとするところによる問題である。

人間発達を環境との不断の交流の蓄積を通して展開していくというダイナミックな過程として捉えつつ、言語認知発達過程そのものに焦点を当てることによって、そこに新たな視点を見出すことができる。そのような作業を通して見えてきたものとして、以下のことが指摘できる。

第一に、自閉症にみられる対人関係障害、すな

わちコミュニケーションの問題を発達論的視点から捉えると、言語などの象徴機能をもつ媒体を介したコミュニケーション(筆者のいう象徴的コミュニケーション)の成立以前のコミュニケーション段階、すなわち情動的コミュニケーションの問題に焦点を当てることが重要である。しかし、この情動的コミュニケーションは、意識の介在しないコミュニケーションであるという性質上、これを直接目に見える形で採り上げて論じることが容易ではない。

第二に、最近の自閉症者自身による手記を通して再び重要視され始めてきた知覚の問題がほとんど五感を中心に論じられているが、発達論的視点から見ると、われわれの視聴覚のような高度に分化した知覚様態ではなく、未分化な知覚様態そのものに焦点を当てる必要がある。それは無様式知覚、すなわち力動感 *vitality affects*¹⁰⁾と相親的知覚 *physiognomic perception*¹¹⁾といわれているものである。

以上の二点は、発達の原初的段階である情動的コミュニケーションを可能にしているのが無様式知覚であるという意味で、相互に密接に関連し合っている。これらの観点に立つことによって、従来指摘されてきた自閉症の多彩な対人行動に対する新たな理解が生まれてくる。

筆者は、関係障害臨床、すなわち自閉症にみられる対人関係障害の原因を、子ども自身の個体内に仮定するのではなく、素質と環境の不断の相互作用の結果の産物、すなわち関係障害として捉える視点に立っている。そのためわれわれは、関係

Principle of the treatment of pervasive developmental disorders in the viewpoint of relational development.

*東海大学健康科学部社会福祉学科

〔〒259-1193 神奈川県伊勢原市望星台〕

Ryuji Kobayashi, M.D., Ph.D. : Department of Social Work, Tokai University School of Health Sciences, Bohseidai, Isehara-shi, Kanagawa, 259-1193 Japan.

障害の内実に迫るために、子どもとわれわれとのコミュニケーションが実際どのように展開しているか、そこに生まれるコミュニケーションの問題を可能な限りありのままに、すなわち現象学的に捉えることを最大限重視している。以下、このような立場からこれまでに得られた知見を整理する形で、筆者の考える自閉症援助論の骨格を論じていく。

なお、これまで筆者は自らの依拠する立場を関係障害臨床と称していたが、われわれの臨床の根幹をなすのは、関係障害に対する介入もさることながら、その後の関係の発達の様相を緻密に捉えながら、日々展開していく関係の変容過程をいかに支えていくかということにある。その意味では、関係障害臨床という呼称は、初期の介入段階においてはふさわしいが、その後の援助過程は、関係発達臨床と称するのが適切であると考えられる。よって、本稿でこれから論じようとする内容は、自閉症治療論というより関係発達援助論と呼ぶ方がふさわしいであろう。以上の理由から、ここでは治療という用語は使わず、介入と支援（あるいは援助）と呼ぶことにしよう。

II. 自閉症の三大行動特徴の理解と支援の基本

1. 対人関係障害

自閉症の子どもの対人的構えが自閉的であるという印象は、今でも多くの人々が抱いているものである。言語認知障害仮説に傾倒していた人々は、言語認知障害をもつゆえに、自閉的行動を呈するのだと考え、それを二次的産物であると思なしてきた。そのような立場の人々は、自らの関係を捨象し、彼らのみを対象化し、観察・評価のもとに論じてきた。

関係発達臨床の根幹をなすのは、自らの存在抜きに子どもの対人関係の問題を論じることは不可能であるという視点である。人間は常に外界に開かれた存在であり、かつ常に外界からの不断の刺激にさらされながら、自らも刺激を発する存在として、相互に影響を及ぼし合いながら、生の営みを展開している。

このような視点から捉え直した時に、最初にみえてくるものは、他者に対する異常な知覚過敏と（おそらくはそれに基づくと思われる）回避傾向を有するという彼らの対人的態度である。そして、その背後に（内面に）強い愛着欲求（甘え）が存在することである。このような心的状態を接近・回避動因的葛藤と称し、それが表面化したものが動因的葛藤行動である⁹⁾。自閉症にみられる特異的な行動の多くはこれに含まれる⁹⁾。このように、彼らの対人関係障害の基盤に、常に強い接近・回避動因的葛藤が働いていると考えられる。

2. 言語的、あるいは非言語的コミュニケーション障害
冒頭でも述べたように、筆者はコミュニケーションを従来論じられてきた象徴的コミュニケーションに焦点を当ててきたことの問題を採り上げてきた。診断基準に述べられている言語的、あるいは非言語的コミュニケーションとは、話しことばを用いるか否かに関わらず、象徴機能を有する媒体を用いるという点では同じ性質のコミュニケーションである。関係発達臨床の視点から捉え直してみると、情動的コミュニケーションと象徴的コミュニケーションという二重構造を有するコミュニケーションの性質そのものに立ち返ることの重要性が明らかになってくる。

情動的コミュニケーションの世界は、われわれ日本人には了解しやすい「甘え」の世界そのものといってよいが、自閉症にみられるコミュニケーションの問題は、この甘えの問題、すなわち愛着欲求に対する強い葛藤状態ゆえに、情動的コミュニケーションが養育者と子どもとの間で成立することに困難が生じていると考えられる。子どもの愛着欲求が適切な介入によって表面化し、それを養育者が受け止めることが可能になっていくと、多くの場合、急速に関係は深まっていく。しかし、何らかの要因によって養育者が子どもの愛着欲求を受け止めることに困難が生じている場合には、そこで捉えられるコミュニケーションの問題は、子どもが強く依存している情動水準と養育者の主なコミュニケーション手段となっている象徴水準（話しことばを用いる）とのあいだで、著しい乖離が生まれていく。自閉症の人々とわれわれとの

コミュニケーションの問題を、このような関係性
の問題として捉え直すことによって、後述するよ
うに、行動障害や言語発達病理の成り立ちを理解
することは可能になる^{2,5,6)}。

3. 強迫的こだわり、同一性保持、常同反復的行動
冒頭で論じた無様式知覚という原初的知覚は、
人間が本来有している動物としての本能的行動を
支配している重要な特性である。ヒトが社会的動
物である人間になっていく過程の最早期の発達段
階で顕している存在、それが自閉症の子どもであ
る。動物行動学接近¹⁰⁾は、本来人間が有している本
能的行動がいかにして社会的行動へと変容してい
くかを考える上で、重要な視点を提供してくれる。

愛着をめぐる強い葛藤状態にある自閉症の人々
が、周囲他者に対して誰とも安心感を抱くことが
困難なため、常に強い警戒心を抱いている。安心
感がなく、警戒心の強い心的状態にあると、人間
は些細な刺激や変化によって異常なほどの不安(恐
怖)反応を示す。そこで不安がさらに増強し、刺
激に対する過敏さはいよいよ先鋭化していく。こ
のような悪循環(図1)が容易に生じてしまうた
め、彼らは極力不安にさらされないために、何ら
かの戦略を立てなければならない。そのための彼
らなりの営みが、極力馴染みのある世界、すなわ
ち変化のない、いつも同じ環境に身を置くことで
ある。その具体的な表現型が、同一性保持、常同
反復的、あるいは強迫的こだわりと称されている
行動である。

Ⅲ. 関係発達支援の基本にあるもの

1. 愛着をめぐる葛藤を断ち切ること

自閉症の子どもと養育者のあいだで愛着形成が
困難な要因は、子どもが有する強い接近・回避動
因的葛藤にある。この葛藤ゆえに、両者のあいだ
に關係の悪循環が生じる。われわれは、ここに生
まれる關係の難しさを關係障害として捉え、いか
にして接近・回避動因的葛藤を和らげていくか、
その介入が初期段階の最重要課題であると考えて
いる。

先に述べたように、この種の葛藤は、刺激に対
する過敏さをさらに増強していくという悪循環を
もたらすため、もともとは子どもの生来的な知覚
過敏にあったとしても、われわれの存在自体もこ
の悪循環を増幅させる要因となっていく危険性が
強いことを常に念頭に置くことが求められる。ど
のような刺激が彼らにとって不快な刺激となるの
かを理解することは、ここでの介入の最大のポイ
ントといってもよい。それはあらゆる刺激を知覚
する際の、無様式知覚の特性を知ることである。
たとえば、われわれの語りかけることばの字面の
意味ではなく、話しことばのもつ声の調子(抑揚、
リズム、強弱、大小など)に非常に敏感に反応す
る。われわれが意図することばの意味にではなく、
ことばに込められた情動性とでもいうことができ
る。ここで临床上重要なことは、この情動性とい
うものは当事者に意識化することが困難であるとい
うことである。したがって当事者にそのことを
気づいてもらうためには、無意識、あるいは前意
識の領域をも視野に入れた介入が必要になる。

2. 愛着欲求を引き出し、受け止めること

初期の介入が功を奏すると、潜在化していた子
どもの愛着欲求が表面化しやすくなる。しかし、
彼らはわれわれの一挙手一投足に異常なほどの過
敏な反応をする。とりわけわれわれの心の動き(た
えば、養育者が他の誰かと話をして、子どもへ
の関心が他のことに移ることなど)に対して、高
感度のアンテナを張り巡らせてキャッチする。そ
れは猛獣にいつ襲われるかも知れないような動物

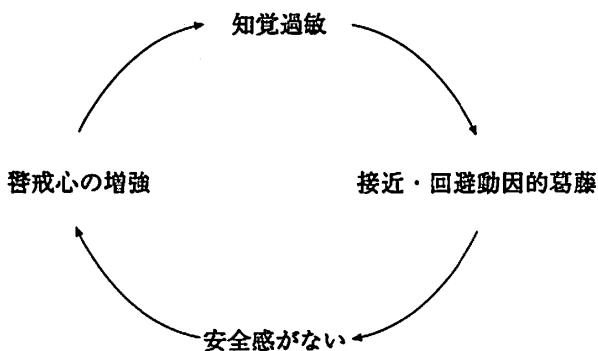


図1 知覚過敏と接近・回避動因的葛藤による悪循環

の世界で生き延びるために微細な刺激にも即座に反応する動物を想像させるほどである。そのため、われわれの不用意な接近は、やっと表面化してきた彼らの愛着欲求の芽を再び摘み取ることにつながりかねない。暖かい眼差し、包み込むような語りかけ、穏やかな雰囲気と心地よいリズムカルな動きなど、自然のもつ穏やかさにも共通するような刺激となる関わりが大切になる。そのような接近は自閉症の子どもに安心感をもたらす。

3. 彼らの好奇心を育むこと

彼らの安心感が育まれていくと、外界に対して驚くほど強い好奇心を示し始める。安心感のない状態では、些細な変化によって容易に不安が引き起こされていた状態は、劇的に変わっていく。外界の些細な変化が彼らの好奇心を駆り立てる。そのような外界に対する好奇心を育むための基盤となるのが、養育者とのあいだに生まれる安心感である。養育者に対する関係欲求、すなわち愛着欲求を高めていくことが彼らへの援助の要となるのは、外界への好奇心を育むための不可欠な要因だからである。

4. 快の情動興奮を分かち合い、高め、持続するように支援すること

不快な情動がフラッシュバックの大きな引き金になるように、快の情動興奮も快適な体験の想起に重要な役割を担っている。楽しい体験とそこで知覚した多様な刺激、とりわけわれわれが彼らに語りかけたことばは、彼らに深く記憶されていく。

情動興奮が持続し、容易に再現することを通して初めて、人間同士の気持ちが響き合うようになる。しかし、自閉症の子どもたちの気持の変化を見ると、情動興奮の流れは断片的で持続性、継続性、連続性に乏しい。たとえ彼らが一時的には楽しんでいるように見えても、その情動興奮は持続せず、まるで何もなかったかのように、突然その興奮は冷めてしまう。フラッシュバックに端的に表されているように、些細な刺激で、不快な情動興奮が突然起こってくる。このようにして、今日の前で開かれている関係の中で体験している世界が子どもの中で切り裂かれ、彼らには世界が断

片化したものとして体験されていくことになる。

彼らにとってわれわれとの対人交流の体験が快の情動体験となっていくことは、自己の形成過程において、これまで考えられてきた以上に重要な意味をもっていると推測される⁷⁾。

5. 子どもの対象への関心の持ち方を分かち合うこと

この段階でわれわれが心しなければならぬことは、一見われわれには些細な変化にしか見えないようなものであっても、彼らの世界ではそうではないということである。われわれの認知する世界と、自閉症の子どもが捉える世界がいかに異なった様相を呈しているか、彼らの心を動かすのはどのようなものか、彼らの視点に立って感じ取ることが大切になる。たとえば、われわれにとっては単に一つの風船でしかないかもしれないが、表面の柔らかさ、弾力性、色具合、口の中に入れた際の感触、表面の光沢とその微妙な変化など、どれ一つとっても彼らの心を揺り動かさずにはおれない。そのような世界にわれわれも身を置くことが求められる。

6. 子どもの対象世界を映し返すこと

われわれはいつの間にか暗黙のうちに、対象世界をことば文化によって、ある枠組みでもって捉える術を身につけている。これが認識といわれる心の営みであるが、彼らにわれわれと同じようなことば文化を身につけるための援助を心がけること、それが彼らへの関係発達支援においてきわめて重要なことはいままでもない。

そのためには、子どもの対象への関心の持ち方、着目の仕方をわれわれが分かち合うことと、そこでわれわれがその場にふさわしいことばを語りかけることが大切である。それが彼らの心の世界をわれわれのことば文化の世界で映し出すという営み(ミラーリング, mirroring)となる。自分の周りに存在する対象(あるいは事象)が彼らにとって何を意味するか、そのことは客観的に一義的に決められているのではない。その意味を規定しているのは、子どもがその対象のどこにどのように着目しているか、どのような状況にあるのか、などといった文脈にある。「いま、ここで」の対象

のもつ意味はその文脈に規定されている。よって、われわれが彼らに語りかけることばは、その文脈にふさわしいものでなくてはならない。

IV. おわりに

これまでの自閉症の原因論は、発達論的視点を欠いた静的なものであった。発達とは本来どのような構造をもち、どのように展開しているのか、そのダイナミックな展開を究明していくことが、自閉症の関係発達支援をより豊かなものにしていくであろう。

自閉症にみられる多彩な精神症状や行動障害²⁾、さらには深刻な自我発達の病理^{7,8)}が、人生最早期の体験に深く根ざしていると考えられることから、本稿で論じたような関係発達支援は、青年期・成人期の精神病理に対する治療のみならず、その予防を考える上で欠くことのできない視点であると考えられる。

本稿では紙幅の都合から、関係発達支援の基本に触れるに留まらざるを得なかった。乳幼児期における具体的な支援^{1,3,4)}、ことばの成り立ちと支援^{5,6)}、行動障害の成り立ちと介入および支援²⁾については、他の機会に論じているのでそれを参考にさせていただければと思う。

本研究の一部は、科研費基盤研究(C)(2)(課題番号14591004)(2002-2003)に依っている。

文 献

- 1) 小林隆児：自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—。ミネルヴァ書房、京都、2000。
- 2) 小林隆児：自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近—。岩崎学術出版社、東京、2001。
- 3) 小林隆児：発達障害治療における愛着形成のもつ意味。乳幼児医学・心理学研究, 10; 29-34, 2001。
- 4) 小林隆児：見立てと介入。乳幼児医学・心理学研究, 11; 27-34, 2002。
- 5) 小林隆児：自閉症のことばの成り立ちを考える(第1部)—青年期・成人期編。児精医誌, 44; 16-37, 2003。
- 6) 小林隆児：自閉症のことばの成り立ちを考える(第2部)—幼児期編。児精医誌, 44; 38-48, 2003。
- 7) 小林隆児：広汎性発達障害にみられる「自明性の喪失」に関する発達論的検討(投稿中)。
- 8) 小林隆児, 小林広美, 船場久仁美ほか：なぜ突然カレンダーを怖がるようになったか—「知覚変容現象」の発達論的再考—。第12回乳幼児医学・心理学学会発表(東京都, 2002. 11. 30.)。
- 9) Richer, J. : An ethological approach to autism : From evolutionary perspectives to treatment. In : (eds.), Richer, J. and Coates, S. Autism : The search for coherence. Jessica Kingsley, London, p.22-35, 2001.
- 10) Stern, D. : The interpersonal world of the infant : A view from psychoanalysis and developmental psychology. Basic Books, New York, 1985. (小此木啓吾, 丸田俊彦監訳, 神庭靖子, 神庭重信訳 : 乳児の対人世界—理論編/臨床編。岩崎学術出版社, 東京, 1989/1991.)
- 11) Werner, H. : Comparative psychology of mental development. International University Press, New York, 1948. (鯨岡峻, 浜田寿美男訳 : 発達心理学入門。ミネルヴァ書房, 京都, 1976.)